

## 家庭内の殺人事件が増えている。

ここのところいわゆる三面記事を賑わせているのが、ドメスティック・バイオレンスをはじめとする家庭内の殺人事件である。親が子供を平気で殺す。そして子供も親を殺す。なぜなのだろうか。以前は尊属殺人という呼び方をして子供が親と同列以上にある血族(尊属)を殺害すると、通常の殺人罪よりも刑が重く死刑もしくは無期懲役だった。ところが1973年(昭和48年)4月4日に最高裁判所において、刑法第200条に規定された『尊属殺』は、日本国憲法第14条(法の下での平等)に反するとして、違憲判決が下され、その後1995年になって、改正刑法(平成7年法律第91号)が国会で成立すると、同条は削除され、明治刑法以来のこの特例は廃止された。尊属殺人の精神は日本人の明治以来の尊属に敬意を表する思想に合致しており、この法改正がなされたプロセスに関しては、一度「Wikipedia」で『尊属殺人』をチェックしておいていただきたい。家族内の倫理観があまりにもゆがんでおり、その犠牲者を救出する手立てを求め、司法がありとあらゆる方法で、加害者となった女性救済に奔走したかが、読み取れるからである。小生は最近の家庭内の残虐な殺人事件の発生に関して、気になることがいくつかある。尊属殺人罪が廃止されたからというわけではなかろうが、家庭内での子供の育て方と、かなりリンクして発生しているように思えてならないからである。それは最近の親子関係の希薄化であり、文部科学省の1クラス25人体制とも密接に絡んでいるようにも見えるからである。この親子関係の希薄化は何が原因なのだろうか。ふと考え込んでしまうことがある。

★ ★ ★ ★ ★

ところで文科省は1クラス25人制を進めてきたが、これでどれだけの利点があったのか小生には理解できない。ただ教員が楽になったとしか思えないのである。それとあえて言うなら日教組の力が弱くなり、教員は家庭教師等のアルバイトがしやすくなった。これだけは確かにいえると思う。しかしその一方でモンスターペアレントを育て、家庭内でのいわば社会教育や道徳教育までもが学校任せとなり、子供たちはセッセッセと塾通いするようになった。本来は教育というものは、社会全体で行うべきはずのものであったが、社会の傾向もこうしたことは学校任せと割り切る傾向が強くなった。しかし学校はモンスターペアレントを恐れ、いわゆる読み書きそろばん以外のことを教えようとはしない。だから道徳教育の授業を行わなければと文科省があせり始めたようにも見える。先の項(05-01)でも述べたことではあるが、通学路に父兄が立って登校する生徒に「おはようございます」と声をかけても、生徒は無言で通り過ぎる。小生は25人教育は、こうした社会とは隔絶された子供を育てる結果になったのではないかと疑っている。どうやら25人クラスでは、社会の縮図を作りあげるには人数不足で、いわば小社会の中で

社会教育と読み書きそろばんとの両方を教えるという本来の教育の姿から、外れてしまったのではないかと考えるのである。

★ ★ ★ ★ ★

イジメも同様のようには思えてならない。つまりイジメられる子は1人、イジメる子が5人いたとしたとき、残りは19人で、このうち10人が無関心としたら、残された9人が力をあわせて、イジメられている子を救済できるだろうかと思うのである。もちろん正義感も強く体力も旺盛で、イジメっ子をやっつけられる子がないという確証はない。しかしこれを期待するのはあまりにも困難なように思う。しかし50人1クラスだったとしたら、無関心な子が倍の20人だったとしても残りの24人の中には、正義を貫こうとする子も出て来ようし、これに同調する子が合計10人出てきても不思議はない。こうなれば数のバランス上、イジメっ子といえども早々身勝手なことはしなくなるだろう。確かに25人クラスは受験に必要な技術を教えるには適度な数だったかもしれない。しかし学校が受験予備校的な教育機関になってはならない。むしろ社会のあり方を経験的に身に着け、自分の社会における役割を自然な形で身に着けてゆくことにあるのではなかろうか。小生は55人1クラスで学んできた。イジメっ子がいなかったわけではない。しかし早々クラスメートを自殺に追い込むようなイジメはなかったし、現在でも年に1回同窓会を、同じく年に1回旅行会を行っている。

★ ★ ★ ★ ★

話は変わるが小生は拾ってきた猫を2匹飼っている。1匹はオスで長野県の佐久で2001年6月に拾ってきた。生まれてから1ヶ月も経ってなかったと思う。まだ顔の表情に胎児だった頃の面影が残っていた。名前は6月3日に拾ったので『ジュン』と名づけた。もう1匹は2014年11月27日に拾ってきた三毛猫の野良である。三毛とはいえ、毛色がほとんど白かったのと、茨城県結城市で拾ってきたので、『結城＝結紀＝雪』と名づけた。同じ捨て猫だが人(猫)格には大きな違いがある。ジュンは生まれたばかりだったせいか、小生のことを親だと思っている。小生のすることはすべて受け入れようとする、お風呂にも一緒に入るしトイレにも入って来て、ひざの上で過ごす。ちょっと寒くなって来ると、小生の蒲団の中で小生の腕を枕にして寝る。クルマで少なくとも1万キロは一緒に旅をしたと思う。ところが『雪』のほうはというと、この2年間、野良を家猫化するのに大変な苦勞を強いられてきた。すぐ表に出たがるし、2階のテラスから下へ飛び降りて近所を一周しないと帰って来ることはなかった。しかも自分の家が分からなくなったのか、近所の大きな家の門柱の上にはしゃがんで小生が迎えに来るのを、待っている風なところまであった。毎日猫を探しに出るのが、まるで日課のようになっていたのである。家の中でも箆笥の上や高い場所へ上りたがり、高い所に置かれたものをよく落として、家具や床に傷を残した。故郷の結城が恋しかったのか、テラスに出て結城の方を向いていつも欄干に伏せていた。

時には雨の降る日も……。小生はこんなとき濡れて戻って来た『雪』の背中をタオルで何度も拭いて背中が乾くまで拭き取るように努めた。『雪』は間もなくゴロゴロと咽を鳴らして喜んだ。そしてやがて背中をタオルで拭いて欲しいために雨の日にテラスへ出るようになった。小生はこの子は、親の愛情に飢えているのかも知れないと考えて、出来る限りジュンと差別することなく、可愛がるように心がけた。この子のいわば素行を直すにはひたすら愛情を注ぐ以外にはないと思われたのである。猫に対する愛情はひたすらスキンシップで、これは殆どの哺乳類に共通しているように思う。頭や、首の下、そして背中を撫でてあげること、両手にしっかりと抱いて、言葉をかけてあげることである。これが何とか我が家の娘として家の中で暮らせるようになって来たのは2年経って大怪我をしてからのことである。2階から飛び降りるとき、ネットを抑えていた針金に腹部を引っ掛けて、10針も縫う手術を受けた。幸い傷が浅かったために大事には至らなかったものの、本人はよほど怖い思いをしたと見えて、以来、小生に対して以前よりはよく懐く様になって来た。だが、いまだに小生の腕の中に抱かれることはない。まだまだ親子の絆が浅いのだろう。

何を申し上げたかったかといえば、『ジュン』は母親に抱かれて育った子であり、『雪』は託児所で育った子に近いのではと思うときがあるのである。猫が例えで申し訳ないが、小生は哺乳動物の様々な習性は、人間ときわめて類似していると思う。人間の進化の足跡が様々な動物の習性の中に、形を少しずつ変えながらも残っていると思える点がしばしば見られるのである。

★ ★ ★ ★ ★

話をもとへ戻そう。最近日本の犯罪を見ると、家庭内の殺人行為が異常に増加しているように見える。この犯罪者の細かいデータが手元にあるわけではないが、こうした犯罪は家庭内の絆が疎遠な人間関係から発生しているのではないかと疑われてならないのである。子供は母親の胸に抱かれて育ち、やがて両親の手に惹かれて歩き、そして一人立ちして友達を作って成人するのが、本来の姿であるように思う。我々、戦中生まれの世代は、少なくとも母親は『内職』こそすれ、外へ出て働くようなことはまずなかったし、大きな柱時計の振り子の音を聞きながら、家族揃って炭をたいた火鉢を囲んで、暖をとり、家族の中で、おのずと人間のあり方、社会のあり方を家族から学んできた。だが現在では、食事の時間もバラバラ、それぞれがコンビニで自分の好きな弁当を買ってきて、自室にこもって弁当をかき込みながら、スマホやパソコンゲームをしたり、友達とメールのやり取りをするという方がむしろ当たり前になりつつある。しかも最近の20代の若者に対するアンケートでは、20%以上の者は結婚はしたくないと言っているそうだ。現実に小生の友人の息子は40代に入った現在も結婚はしたくないと言っているのだという。これでは将来の日本の人口は、当面は減る一方で、人口が1億人の大台を割ることも早々遠いことではないように見える。小生はこうした現代社会を『個集家族社会』と呼ぶことにして

いる。だから若い男性も女性も、電化製品とコンビニに、多くのものを委ねて、面倒な結婚生活などしない方が、よほど幸せと考えている者も少なくない。これでは人口の増加など望むべくもないし、家庭崩壊もむしろ加速せざるを得ないだろう。おまけに幼年時には学級崩壊もある。本来の『核家族化』が目指したものは、日本の古い嫁、シュウト、シュウトメという家制度を解体して、夫婦とその子供を一つの核とする家族のあり方を旨とした筈であったが、核家族化はさらに進んで今では『核分裂家族』になってしまった。そして現在の家庭内は『個集家族』になろうとしているというわけである。だがこれでは一つ屋根の下の集団生活と大差ない。もはや家族の絆など、ないに等しい状態になっているのである。会話もなければコミュニケーションもない。まさにイエスかノーかのデジタル信号だけで済ませてしまう傾向にある。家庭内でも会話は無料のアプリになってしまっているケースさえある。お互いのご機嫌を伺う必要もなく最低限の意思の疎通は出来る上に、昔のようなインターフォンをつけるよりも安上がりである。3階建ての家に家族で暮らしていれば、むしろ合理的かもしれない。このデジタル社会はそれやこれやの便利さと引き換えに、家族がどこで何をやっているかという最低限の家族間情報でさえも、家族間のコミュニケーションの機会までも失ってしまったのかもしれない。そしてその原因を追究してみると、どうやらスマホの普及の他に、こうした幼児時代の親子のコミュニケーション不足。さらには25人学級の閉鎖性にあるように見えるのだが、いかがだろうか。

★ ★ ★ ★ ★

そこで小生が気にかけている点は、幼少期を母親の手で育てられなかった人間は、社会への順応や、隣人との付き合い方、あるいは家族内でのコミュニケーション等に支障をきたすことがおこる確率が、高くなっているのではないかという危惧である。残念ながらそれを裏付けるような資料はまったくないのだが、このような犯罪が起こったとき、その犯罪者の幼年期の育てられ方を細かく分析し、託児所なり、ベビーシッターなりとのかかわりに問題がなかったかどうかのデータを集めて、政府が今、進めようとしている託児所政策が、社会的に見て合理性が高いのかということ进行分析していただきたく思っている。小生が家族同様に可愛がっている猫においては著しい差異があるのは単なる偶然によるものか、生後数ヶ月で母親の手から野良へと、引き離された結果によるものかも定かでない。だがこれは猫の世界であるからどうあろうとたいした害はない。しかし人間なら別問題であろう。幼少期のあり方を分析することにより、子供の育て方がどうあるべきかを論議するための、一つのヒントも潜んでいるのではないかと思えるのである。最近の家族内の様々な殺人事件等をかんがみると、どうしても犯人の幼少時がどんな育ち方だったのかが気にかかるのである。託児所で育てられようと、家庭内で母親の手で育てられようと、子供の心になんら差異が見られないようなら、それはそれもよいだろう。託児所政策

に異存はない。だが、子供の心がここで屈折して行くようなことがあると思われるなら、今、早急に進めなければならないのは、むしろ在宅勤務＝テレワークの推進である。特に女性はいわば「内職的」にパソコンをフル活用して在宅勤務を進めて、子供をそばで遊ばせながら仕事することへとシフトしてゆくべきであろう。

★ ★ ★ ★ ★

在宅勤務が高度に進捗すれば、夫婦とも自宅で仕事する時間が長くなり、夫婦によっては苦痛の時間が長くなることも、逆に夫婦が交代で両親の介護が出来たり、郊外の広い庭のある家で、家庭菜園をしながら生活できるといったメリットも生まれて来よう。政府の働き方改革は、残業時間がどうだの、月々の就業時間がどうだの 20 世紀の枠の中で、重箱の隅をつついていく感がある。そうした枠を思い切り取り払って、産業革命まっただ中の家族関係をどういう形で築きながら、夫婦関係を維持し子育てをし、さらには親の介護をすべきか、その大枠を築いて後、時間外や、就業時間、就業日数などの規定を設け、それに見合った給与体系をどのように作り上げてゆくべきか、ここを論議することに重点を置くべきではなかろうか。役人はとかく前例主義にこだわるあまり、いつもいつも本来の改革が出来ずにいるように思えてならない。

★ ★ ★ ★ ★

残念なことに小生が定年まで勤務していた会社で、入社 1 年目の社員が、過労自殺をして世を去った。しかもこの自殺は、2 例目の件であり 1 例目の社員は小生もよく知っている後輩だった。社会では会社が悪いという前提で今回の事件を見ているように見えるが、この見方を否定する材料があるわけではない。しかしこの 20 年間でマスコミは情報産業革命の中、大きく変化してきた。特に彼女が所属した IT 局は誕生してからの歴史も浅い局であり、いまだにそのビジネスモデルが確立されていないセクションのようにも思う。彼女がどんな企画をしていたのかも定かではないが、この分野は今や魑魅魍魎の世界であり、明日何が起こるかも分からないような最先端分野である。小生が在職した当時、100 時間を越えて残業したこともしばしばあった。しかし小生の場合サービス残業をすることはまずなかった。上司は各社員がどの程度の仕事を抱えているかは承知している。もちろん代替者が作業を手助けすることも不可能ではない。しかし電通の作業はしばしばキャンペーン型で、一時期が過ぎれば、台風の後の風のように静まり返る。上司はもちろんのこと三・六協定を守るように指示する。しかしその一方で、溢れた時間はメモしておいて、「暇なときにカラでつけて置け」とも言われたものだった。こうして帳尻合わせをすることにより、年収面では優遇され、どんなに忙しいときでも決してネを挙げる者はいなかった。これは俺の仕事と誇りを持って取り組んでいたからでもあった。ただ今回の事件では、彼女自身が自分で、何をやっていいのかが、見えてなかったようにも見える。IT は今では幅が広く、得意先に

も明確なオリエンテーションが出来ていなかったのではなかろうか。いわば痒いところも分からずに背中をかいてくれ、と言っているごときものである。そしてこの得意先の痒いツボを見定めるのは新入社員ではほとんど不可能なことであろう。これを補ってどういうところに的を絞ってゆくか、これを得意先と打ち合わせしながら絞り込んで、部下に指示するのが上司の仕事である。それを「お前の数十時間の残業が無駄金だった」と評するのはおかしい。むしろ無駄金はこの上司の『管理職手当』だったろう。しかし電通という会社は人事局の権限はきわめて低く、人事局は辞令の発行所ではない。人材の優劣をしっかりとつかんでいる者もほとんどいない。だから電通の人事は「マーじゃん、ゴルフと、酒だな」と手振りを交えて語っていた外部の人間も多かった。要は直属の上司との人間関係のみで、つまり上司の好き嫌いで、ボーナスの査定から人事異動まで行われるのである。彼女の配属先がIT局ではなく、マーケティング局やクリエイティブ局であったなら、彼女の力を発揮できる場面もあったろうし、彼女の立場を十分に理解し、きちっとしたサジェスションできる上司にも巡り会えたと思われ、優秀な才能が失われてしまったことは、ひとえに電通のみならず日本の損失のように思えてまことに残念である。それに彼女に相談できる同期の社員がいなかったことが惜しまれてならない。死を選択する前に、いっそう電通を退社して異なった道を探るべきではなかったろうか。24歳の若さなら『社風が自分に合わなかった』という理由で、他のどんな会社だって、彼女を受け入れる下地はあるだろう。彼女は社員寮からの通勤であったが、もし在宅勤務であったなら、母親からの様々なアドバイスやら、何がしかの心の支えを得ることで自殺にはいたらなかったのではないかと思われ、残念でならないのである。

★ ★ ★ ★ ★

在宅勤務は主婦にとっては負担も増えて厳しい面もあろう。しかし通勤の困難やその疲労と、有効とは言いがたい通勤時間の過ごし方を考えれば相殺しても余りあるように思う。そして自分の好みの時間帯に仕事が出来るという点で、これに勝る益はない。場合によってはむしろ効率が高まることも想定されるからである。生活してゆく上での収入はもちろん最も大事な要件であり、国家的な見地からすれば、優秀な人材が社会の一角で役に立つ機会を持てるという点でも重要な意味がある。しかしそれにも増して重要なことは、子供は母親のそばに寄り添って、親を見習って育つ。母親は自分の子供を大切に育て、保育士のように分け隔てすることはまずない。大切なことは人間というより、すべての哺乳類の子供は母親から生きてゆくための術のすべてを学び、やがて旅立って行くと言う事実であろう。人間は確かに進化を遂げた動物であり、単なる哺乳類として扱うことは出来ない。しかしだからこそもう一度原点に立ち返って、動物の子育てに学ぶべきことは多いのではなかろうか。

(2016. 11. 11.)